



ア
リ
マ
ス
—



アレルギー

「本当のことなんて言ってはいけません」

それが祖母の口癖だった。

両親とも仕事が忙しかったので、幼い私は、ほとんどの時間を祖母と過ごした。

ある日、保育園で子犬の絵本を読んでもらった私は、帰り道、手をつないだ祖母に言った。

「おばあちゃん、真由ね、犬が飼いたい」

祖母は、困った顔を向けると言った。

「飼ってあげたいけどねえ、お父さんが動物アレルギーだからだめなのよ」

「動物アレルギーって？」

「犬や猫のそばにいるとね、息が苦しくなってしまうの。ひどい時は、死んでしまうことだってあるのよ」

耳慣れない言葉を、無邪気にたずねただけだった私は、体をふるわせて、心の芯に刻んだ。

(犬を飼うとお父さんが死ぬ)

それからは、どんなにかわいい犬を見かけても、友達がペットの自慢をしても、じっと我慢した

。

二年生になった春の午後、近くの友達三人と、公園で遊んでいた。

「わあ、かわいい。首輪つけてないからノラ犬かなあ」

そばに寄って来た小犬をなでながら、祥子ちゃんが言った。

「どこかのおうちの犬かもしれないね。見かけたことないけど」

そしてすぐ、自分の飼い犬のバスケットを持ってきた。それから夕方まで、三人は近所をたずねて回った。飼い主は見つからず、途方にくれ、疲れきった私たちは、なんとかしなければと話し合った。

絵葉ちゃんは、お母さんに頼み込んで、少しの間だけ庭に置いてもらえるようにした。祥子ちゃんは、赤い画用紙に自分の名前と電話番号を書くと、長いリボンでその犬の首に付けた。

「真由ちゃんは？ 何もしないのはずるいよ」

祥子ちゃんにそう言われて、私はオロオロと家に帰った。音をしのばせて、冷蔵庫から牛乳パックを取り出した。

「あら真由ちゃん、牛乳飲むの？ えらいわねえ」

和室にいると思ったおばあちゃんが、キッチンに現れ、飛び上がった。

「う、うん、す、すごくのど乾いたから、いっぱい飲むの」

そう答えると、大嫌いな牛乳を飲んでみせた。おばあちゃんの間をみて、牛乳パックを抱えると、祥子ちゃんの家に行った。

「マグカップなんて持って来ても、犬は飲めないんだよ」

絵葉ちゃんが、あきれたように言った。

「う、うん。うっかりしてた。あはは」

恥ずかしさとまだ口に残っている牛乳の臭いで、涙が出そうになった。お腹がすいているに違い

ないと二人に言われ、また家にもどった。クッキーをにぎりしめて、玄関を出ようとする、おばあちゃんが現れ、わたしの手元を見て言った。

「あら、真由ちゃん、おやつ？ もうすぐお夕食よ」

「あっ、あのね、祥子ちゃんと絵菜ちゃんとお外で食べようと思って」

「まあお行儀悪いのねえ。お家でおあがりなさい。二人を呼んでらっしゃい」

「で、でもね、公園がいいって」

「しかたないわねえ、手を洗ってらっしゃい」

そう言うと、かわいいナプキンで三つの包みを作ってくれた。祥子ちゃんの家でクッキーを勢よく食べる犬。その背中ふわふわの毛をなでていると、わたしはうっとりしてしまった。

沈んでいく太陽にせかされるようにして家に帰ったが、手や胸に残った犬のやわらかさばかり思い出していた。

そして突然、よみがえったのだ。

(犬を飼うとお父さんが死ぬ)

午後ずっと犬とふれ合った私の『アレルギー』が、お父さんにうつたらどうしようかと、いてもたってもいられなくなった。お風呂で髪や体を何度も何度も洗った。

翌日、その犬は祥子ちゃんちから逃げ出した。そして、飼い主のもとに戻った。引っ越して来たばかりで、ちょっと目を離した時に首輪がぬけて、飛び出してしまったのだという。

飼い主が、あの名札を見て電話をかけてきたのだという。そう祥子ちゃんが教えてくれた。

今から考えれば、子犬と思ったのは、マルチーズで、トリミングもしてあり、野良犬とは程遠かった。

「わたしね、新しい家では犬を飼うの。ずっと夢だったから」

明日は嫁ぐという日の夜、珍しくビールを飲んでくつろいでいた時のことだ。ホームドラマのようになしっとりとした話題もなく、ふと言葉が出た。父が、ちょっと赤い顔で、不思議そうに私を見た。

「えっ、そんなことが夢だったのか？ 飼えばよかったじゃないか」

「だってお父さん、アレルギーでしょ」

「なんだ、それ？」

きよとんとした父が、そうたずねた。

「おばあちゃんにずっと言われてたもの。動物アレルギーだって」

もったきよとんとした私も、グラスを置いて答える。

「俺、子供の時ずっと犬飼ってたぞ。捨て犬拾ってきては飼ってた。四匹飼ったぞ。」

「うわー、またかあ。見事にやられたわ。二十年間だよ～」

父は、ビールをぐーっと飲むと言った。

「そういえばどの犬も、学校から帰るといかなかったよなあ。おふくろは逃げたと言ったが。あれもか！おふくろは動物は嫌いだったからなあ」

のけぞりながら、私は和室に目をやった。仏壇の祖母の写真が、確かににんまりと笑った。

祖母真理子の口癖は、
「本当のことなんて言ってはいけません」

名前と正反対の人だった。